

カルマ・チャクメーの極楽願文 『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究

——観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段——

中御門 敬 教

【抄録】

カギユ派、ニンマ派の学者・行者カルマ・チャクメー（ラーガアスヤ、1612-1678）著『大楽誓願』は、ゲルク派の祖ツォンカパ（1357-1419）著『最上国開門』とともに、チベット仏教におけ最も広く普及した極楽願文であり、宗教的だけでなく文化的にも重要である。チャクメーの極楽願文は、彼が指導した活仏ミギェル・ドルジェ（1645-1667）が無量光三尊を見て教えられたという虚空法（天空法）の法類に所属しており、それらの儀式や法要において大きな役割を果たすとともに、宗派や儀式を越えて広く用いられた。本稿においては、藤仲孝司氏との協力のもと、礼拝対象である観自在と大勢至の両協侍と極楽浄土の特性と、彼らに対する供養に関する部分を、翻訳研究した。

キーワード：カルマ・チャクメー（ラーガアスヤ）、極楽願文、虚空法、『清浄大楽国土誓願（大楽誓願）』、ミギェル・ドルジェ

はじめに

本稿は藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究—序分と礼拝対象の無量光仏の段—」の続編である。論述の形式は同論文に従う。すなわち、ジクメー・チョデンパ（'Jigs med chos ldan pa）ないしトゥクジェ・ジャンペン・ペルサン（Thugs rje gzhan phan dpal bzang）による『清浄大楽国土の誓願の弁別釈・大楽国土へ往く善き階梯』の理解を註記で示し、ギェルケンポ・タクパギェルツェン（rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan）による『清浄大楽国土の誓願』抜粋版の対応箇所を太字で示した。記述の根拠についても註記に示した。

本文和訳

[2-1-2-2. 眷属を作意する cf. 『弁別釈』 7b3]

1) [依怙主無量光の] 右には[大聖] 観自在菩薩一(宗645) 身は白色,[一面二手であり,受用身の品々で飾られている。] 左手は[三宝を表す印により] 蓮華を[心臓のところ]に持つ。[無量光の] 左には大勢至菩薩[すなわち金剛手]²⁾ — (PS4a) [身は] 青[色であり],[仏の力のしるしである] 金剛[杵]により表示された[白] 蓮華を左[手に持っておられる]。[脇侍の] 二人の右[手]は,[一切有情を済度する] 施帰依印を私に(Toh. 3a) 示している。

[それら] 三人の正尊は山の王スメールのように, 清明, 照耀, 巍巍として居られる³⁾ [一彼らの] 眷属は, 菩薩の比丘十万の千万(コーティ)⁴⁾。すべてがまた金色[を

1) 左右の脇侍としての観自在と大勢至が明確な形で登場する経典は、『鼓音声陀羅尼経』である。cf. 中御門 [2006b] p. 44; 太字の部分(以下同様)は, ギェルケンポ (2a3-4) に対応がある。ただし「三種の法衣を召して黄色である」の個所は, 「美しく居られる (mdzes par bzugs)」となっている。cf. 中御門 [2009] p. 256

2) 『弁別釈』に次のようにいう—

「依怙主無量光[仏]の右には, 大聖観自在菩薩一身の色は赤, 顔は一つ, 手は二つ。受用身の品々で飾られている。左手は三宝を表す印により白蓮華の茎を心臓に持ち, それも聴聞した義が相続に[円満に] 具足したしるしとして, 耳の方へ[蓮華が] (8a) 開いている。かの依怙主[無量光]の左には, 大勢至菩薩すなわち金剛手一身の色は青, 顔は一つ, 手は二つ。受用身の品々を持ち, 勝者すべての力のしるし[である] 金剛杵により示される白蓮華, 三[宝]を表す印を, 左手に持っておられる。この二人の薩埵の右手二つは, 一切の有情を輪廻の苦から済度する bhadra (吉祥)[である] 施帰依印を, 私に示している。二つの脚は世の衆生の利益に対する疲労困憊を離れた bhadra (吉祥), 立って(※) 住しておられる。」

(※) 'greng bu に見えるが, 意味を考えて 'greng bar とした。ラクラ・ソナムチュードップ著『大楽国土誓願の註疏』 p. 36にも bsgreng ba と理解しているようである。

八大菩薩のなかでの観自在, 金剛手の姿, 持物については, 頼富 [1990] p. 610ff. を参照。

チベットでは菩薩として文殊師利, 観自在, 金剛手の人気が高い—これらは各々, 智慧, 慈悲, 力を象徴する。そして, 大勢至菩薩の憤怒形が金剛手菩薩とされている。大勢至は本来, 智慧の菩薩であるが, その名から, 力を象徴する金剛手と関連づけられたのかもしれない。金剛手は釈尊の元來, 護衛者としてのヤクシャであり, 毘沙門天とも関係があった。その住所は『大宝積経』「密迹金剛力士会」において, 柳葉宮 (Cang lo can, Atakāvati) とされている。これらのことは東アジアの浄土教では全く考えられていないようである。cf. 山野 [1998] [2001]; 藤仲 [2006] p. 85 note 121; 宇野 [1987]

3) 『弁別釈』には, 山王スメール, 七つの金山などより勝っているし, 身は相好の自性, 語は梵天の音声六十支分の自性, 心は一切相智の智慧の自性として顕明であるという。典拠としては, 『無量寿経』の後半でアーナンダなどが無量光仏と極楽浄土を拝見する個所において, 無量光仏の光明が十万・千万の仏国土すべてのメール山などすべてのを貫き, 圧倒したという記述, 無量光仏とその菩薩衆, 僧伽が山王スメールのように全方向を圧倒して光り輝いているという記述が見られる。また『同経』の後半で, 極楽に往生した人たちの性質を述べた個所(漢訳「五悪段」の直前)でも, 彼らは智慧がスメール山に等しい, 異論者により動揺しないのがスメール山のようなものである, といわれている。『同経』の誓願(梵本では第20願)には, その国土に生まれた者すべてが三十二相を具えないかぎり正覚を得ないという記述がある。六十支分の音声については, 『大宝積経』「密迹金剛力士会」に基づいて『大乘莊嚴経論』などに説かれたものが有名である。cf. 中御門 [2006a] p. 48

4) 『弁別釈』に「眷属として「菩薩の比丘十万の千万」といってきわめて多いという意味で、

具え], 相好により荘厳されている。三種の法衣を召して黄色であるのが充ちている⁵⁾。
(PS4b)

〔2-2. 極楽往生の第二の因⁶⁾—福德の資糧を積む cf. 『弁別釈』 9b1

2-2-1. 慢の対治—帰命（礼拝）の支分 cf. 『弁別釈』 9b3

2-2-1-1. 名号の別名四つを念ずるのを通じて帰命する cf. 『弁別釈』 9b4]

⁷⁾ [自己が] 信解, 尊敬し, 帰命するにあたって, 遠近の [二つは] 分け隔てが無いから⁸⁾, 私の [身語意の] 三門により, [大きな] 尊敬をもって帰命 [・礼拝] します。

す。あらゆる者すべてもまた金色を具えているし, 三十二の妙相と八十の随好により荘厳されている。三種類の法衣を召して、内の青い海に日光が当たるような、黄の顕明に住しておられるのを修習します。「これは黄色」というのはまさに黄であり、勝れた者の宝の見かけとしても顕わす。」という。典拠については、註5を参照。

5) 『無量寿経』蔵識の第3願にこの内容が見られる。cf. 藤仲 [2006] p. 81 note 102

6) 因の第二「福德の資糧の集積」であり、その具体的な行動として七支供養である。『弁別釈』には、まず『広大遊戯経』[第22章「現等覚」]に「福德をそなえた人は思ったことも成就する」と説かれているとおりのため、殊勝なる誓願を立てるには資糧を積むことが必要です。そのうち、不可思議な資糧の集積の門から、まとめると、七支が集まっていないものは無いから。」という。『広大遊戯経』(*Lalitavistara*, 大正 3 No. 187 『方広大莊嚴経』)の該箇所は D No. 95 Kha 171a4である。この経典は大乗の仏伝文学としてチベットで多く用いられる。『弁別釈』は次に七支供養を示すが、各支分が煩惱の対治として提示されている—これは、インド撰述で七支供養を説く根本典籍〈普賢行願讃〉やその註釈類には見られない。

まず第一の支分、礼拝の支分である。〈行願讃〉の諸釈の対応箇所については、中御門 [2006] pp. 11–14, pp. 35–49を参照のこと。

また『弁別釈』には、この極楽願文には鼓鏡とマンダラ、飲食の供物は必要無いとし、『虚空の法 gNam chos』に「マンダラは無いし供物は無い」というやり方と同じであるという。「自己の顔を西方に向けて極楽世界を面前生起する仕方として明瞭にすることは、きわめてよい。描いてなくて自然のマンダラである」と仰っているように、第一の形相が明瞭であるこれは重要である。明瞭でないなら、大楽国土のありさまを思い浮かべて明瞭にする。無上瑜伽の二次第のうち生起次第では立体的な身を平面的に観想してはいけなと言われるが、ここでは明瞭にするだけでいいが、夜の夢にも忘れないようなものが必要である、と記憶を強調する。なお、顔を西に向けて極楽浄土を作意して眠ることは、『声聞地』などにおいて仏道修行者が眠るとき、北に頭を向け右脇を下にして光明を作意しつつ眠るべきとされたことを、継承したものであり、サキヤ・バンディタの『無量光の修習の義 sNang ba mtha' yas bsgom don』などいわゆる「睡眠修習 nyal bsgom」に見られる。

7) mos gus phyag la; 信解, 尊敬は証浄あるいは願楽とともに信の三種類の支分であり、本著の典拠の一つとされる『阿弥陀鼓音声陀羅尼経』にも出る。cf. 中御門 [2006] p. 45 note 41; ちなみにその内容について『唯識三十論』のスティラマティ 釈の心所の箇所 (ad v.10d) では次のようにいう—

「そのうち、信は業と果と諦と宝に対する信認と心の澄浄と願楽である。信は三種類として起るからである。[すなわち] 有徳あるいは無徳の事物に対しては信認の行相があり、有徳の事物に対しては澄浄の行相があり、証得しうべき [滅諦], あるいは [道諦を] 生じさせうる能力ある有徳の事物に対しては願楽の行相がある。心の澄浄は、信は心の昏濁と相違するものである、これによって [信が] それ [心] と相応するときには、煩惱と随煩惱という垢の昏濁を離れる。よって、心が信に合えば澄浄になるから、[信は] 心の澄浄と呼ばれる。そして、これは欲に所依を与えるという作用あるものである。」

和訳 山口, 野沢 [1953] pp. 264–265; 信の三種類は『解脱莊嚴 *Thar rgyan*』第2章にも扱われる—『解脱莊嚴』はカギユ派の根本典籍であり、チャクメーも学習したとされている。和訳 ツルティム, 藤仲 [2007] pp. 93–94

8) 『弁別釈』に「自己に信解, 尊敬が有るのなら, [帰命・] 礼拝される対境のような面前」

[2-2-1-1-1. 法身無辺光に帰命する cf. 『弁別釈』9b4]

法身無辺光 (sNang ba mtha' yas)⁹⁾ [すなわち、蓮華] 族の正尊¹⁰⁾。右手の (東洋2b) [白い] 光から変化された [聖者] 観自在¹¹⁾、さらに変化された百の千万 (コーティ) の観自在。左手の [緑の] 光から変化されたターラー [明妃]¹²⁾、さらに変化された百の千万 (コーティ) のターラー。(Toh. 3b) (宗646) 御心の光から変化された (PS5a) [オディヤーナの大軌範師] パドマ・サムバヴァ¹³⁾、さらに変化された百の千万 (コー

に有るなら近いものと、これから探し求める [あるいは礼拝される] ような遠いものとの二つに、差別は無いから」という。

- 9) 魏訳の「十二光仏」の個所に二番目に出る名であるが、チベット語訳では sNang ba dpag tu med pa であり、異なっている。『弁別釈』に「法身」といって勝者すべての変化のもとたる善逝無辺光は、あらゆる部族の主、語の蓮華族」というのは、チベット語訳 sNang ba mtha' yas の「現れが無限であるもの」という意味に基づいた説明であろう。
- 10) 上註の『弁別釈』に「語の蓮華族」などというのは、金剛界マンダラの仏、金剛、宝、蓮華、事業の五部族のうち西方に位置し、語を司る蓮華族をいう。身語意の三業のうち語業を蓮華族と結びつけることは、直接的には未詳である。ただし、葬儀儀礼との関係でチベットに早くから導入された『悪趣清浄タントラ』には無量寿仏の語マンダラが説かれており、これに関する灌頂は、非時の死を破るとされ、インドの成就者ミトラヨーギンからの伝統が伝えられている。また、頼富 [1990] pp. 213-214によると、『初会金剛頂経』においては、上記の五部族が如来部、金剛部、宝部、法部、業部の五部に配当されるとき、西方の阿弥陀仏とその眷属は「法部」として特徴付けられ、「羯磨印」として「禪定印」が説かれるほかに、「正法輪の印により、法輪を転じるであろう」ともいうことが指摘されている。これは説法と関連づけられた事例であろう。
- なお、ニンマ派の伝承では、法身無量光、受用身観自在、変化身パドマ・サムバヴァとする解釈もある。古くは、同派の gTer ston (埋蔵経発見者) Nyang ral nyi ma 'od zer (1124-1192) がそのような三身に対して帰命した願文が、紹介されている。cf. Kapstein [2004] p. 24; またパドマ・サムバヴァの伝記については、W.Y. エヴァンス [2000]; 藤仲 [2006] p. 67 note 51
- 11) 『弁別釈』には、聖者観自在は男性すべてを調伏、教化するという。またチャクメーは、「国土の選択」において、観自在菩薩はポタラに住し、チベットのゾンツェン・ガムボ王、カルマカ、賢劫の千仏さえも観自在菩薩による変化であるとしている。cf. 藤仲 [2006] pp. 84-85
- 12) 『弁別釈』には、ターラー (漢訳「救度母」、チベット訳ドルマ) は女性すべてを調伏、教化するという。ターラーは観自在の瞳から生まれたとされる美しい女神であり、観自在の救済に漏れた有情をも済度するとされる。この名は八つの怖れから済度することにちなんだものである。八つの怖れについては、下の註24を参照。女人成仏の姿とも考えられ、インドでの女神崇拜の伝統を承けて、大きな信仰を集めた。その身体の色 (白、緑など)、印相など様々なものがある。チベットでは女性の名としても「ドルマ」はしばしば用いられる。cf. 田中 [2009] p. 158ff.
- 13) 『弁別釈』には、五相の見方 gzugs lnga ldan を挙げている (これは『蔵漢大辞典』 p. 2495によると、「兜率天の一生補処の菩薩が見る五つのこと - すなわち、国はカピラヴァスト、種姓は王族、氏族は甘蔴積迦族の系統、母は摩耶夫人、時は五濁の隆盛」というが、ここには必ずしも合致しがたいように思われる)。ともあれ、心の五色をそなえた光が、南西の乳を持った海 (そこにパドマ・サムバヴァの聖地「猫牛洲」がある) に放たれたことから、教化しがたい教化対象者一鬼神がいて寂靜尊の姿では教化できず、忿怒尊の姿で調伏されるべきであるし、雪国チベットは仏菩薩により見捨てられていたのへ教えを隆盛させるために、変化したウギャン (オディヤーナの転訛) の大軌範師パドマ・サムバヴァと、その百の千万の再変化したジャムブ洲での百の千万のパドマサムバヴァ、などという。なお、チャクメーは「国土の選択」において、パドマ・サムバヴァの聖地「猫牛洲」について、ニンマ派すべての者は彼への信解が大きくてそこに生まれる誓願を立てるが、成就者のタントラの聖地

ティ)のウギャン〔すなわちパドマ・サムバヴァ〕を放出する一法身(祝219)無量光(‘Od dpag med)に対して,〔身語意の三門の尊敬でもって〕帰命します。

〔2-2-1-1-2. 一切智者無量光に帰命する¹⁴⁾ cf. 『弁別積』 10b2〕

〔無量光仏は〕仏眼でもって昼〔三回〕夜〔三回, 合計〕六時に, 有情すべてを〔大いなる〕憐れみにより〔常に〕見られる¹⁵⁾。〔すなわち〕有情すべての意(こころ)に念じられた分別の〔微細な〕閃きを〔もまた〕常に心で知られる。有情すべてがおよそ口に語った〔一つの〕言葉を〔もまた〕常に混同なく個々に耳〔根〕に聞かれる(PS5b)〔ので,〕一切智者〔である〕無量光に対して, 帰命します¹⁶⁾。

〔2-2-1-1-3. 導師無量光に帰命する¹⁷⁾ cf. 『弁別積』 11a3〕

へへの生は全面的に肯定できることではなく問題があること, それは最終的に極楽浄土に生まれる因であることを, 述べている。cf. 藤仲〔2006〕pp. 70-72

14) この段落に関する『弁別積』は, 小野田〔2000〕p. 7に紹介されている。

15) 仏が大悲をもって昼夜六時(晨朝, 日中, 日没, 初夜, 中夜, 後夜)に一切の世間を観察することについては, 『莊嚴經論』XX-XXI 56に見られる。その偈は『撰大乘論』にも引用されている。cf. 長尾〔1987〕p. 375; 『弁別積』には, 例えば, 澄んだ鏡の面に映像, または大きな海に日月星宿が浮かんだように, 混同せずに知られることをいう。仏の特徴を表した仏の名号「世間解」について無著・世親兄弟の説明は, 中御門〔2010〕p. 77, 同〔2008〕pp. 121-122を参照。

16) 『弁別積』に, 「信をもって合掌したのと, 信解・尊敬を一回したのも必ずお考えになる, 知られると思って, 疑いが無いことが重要です。」という。

17) 『弁別積』に次のようにいう—

「一般的に極楽に生まれぬ二人の者が有る。法を捨てたものと無間業を為すものです。では, その二人は悲により撰取なさらぬのかと思うなら, 悲により撰取なさらぬわけではない。誓願が成就する処(ことわり)が無いことを意趣なされたのです。

それもまた, 「法を捨てる」といって, 聞思の学究を少し知った者においては, 様々な矛盾を含むような上下の排列の説明を混ぜてから, 正法について法でないと言ふことと, 法でないものを法に造ることと, その力でもって自らの捨てたものや他者に捨てさせることと, さらに勝者の聖教の或るものについて善いと想い, 或るものについて悪いと想うこと, 自己の教派, 学説を讃えることと, 他者の教派などを非難することと無辺のものです。父と母と阿羅漢の三者を殺すこと, 〔和合した〕僧伽を破ること, 如来の身に対して悪心により出血させること, すなわち無間〔業〕の五つです。それもまた, 教の法を聞く場合に話をするなどにより中断させても, 法身に傷を付けたのです, と仰っています。

けれども, そのように為してしまっても, 至心に懺悔し誓願を立てたなら, 生を展転してから, 〔極楽に〕生まれぬ(12a)という決定は無いのです。

そのように何でも為したものでない, 主のあなたを信じて疑い無く, 心底, 骨の髄から誓願を立てたほどの者すべては, かの極楽国土に生まれる誓願は成就しているし, 最高〔の者〕は臨終の〔時, 自己の心身の〕大種が隠没する次第(※1)が生じたとき, 勝者無量光が比丘の僧伽を伴った二人の長子など何によっても引導されるし, 罪ある者たちはこのとき罪の自己の色により閻魔などの光景が浮かぶのです。そのようでもなく, 中有(※2)において錯乱の現れが浮かんだそのときに出現なさって, その最上国へ引導なさることを, 釈迦牟尼が多く〔願教の〕経・〔密教の〕タントラに説かれています。

それもまた, 『無量光国土莊嚴經』(※3)に〔法蔵菩薩が世自在王仏の前で,〕「世尊よ, もし, 私が正覚を得るとき有情たち—他の世界において無上正覚に発心してから私の名を聞いて, 心がきわめて浄信して, 私を随念する者たちが, もし死期が近づいているとき, 私は比丘の僧伽により取り囲まれて面前に並ぶ, すなわち散動なき心でもって住していないかぎり, 私は無上正等覚を正等覚しません」などというのと, 「私の名を聞いた有情たちが私」

法を捨てた者、無間を為した者以外、あなたを信じて〔極楽への往生の〕誓願を立てたかぎりの者すべてが、かの極楽〔浄土〕に生まれる〔というかつての〕誓願が成就した¹⁸⁾、〔そして有情が死んだ直後、〕中有¹⁹⁾に〔東洋3a〕出現なさってかの〔極楽〕国土へ引導なさると説かれた²⁰⁻²¹⁾導師無量光に帰命します。

〔2-2-1-1-4. 依怙主無量光に帰命する cf. 『弁別釈』12b6〕

あなたの寿命は〔不可思議な〕無数劫です²²⁾。(宗647)〔寂静の〕涅槃〔に入ること

ゝの国土に常に来ますように!〕などという誓願を立てたとおり成就するので、ゆえに導師無量光に帰命します。〕

(※1) 北村, ツルティム [2000] pp. 138ff.; 平岡 [1994] p. 56ff.

(※2) 極楽往生するときの中有の有無については、後の註19を参照。

(※3) 「聞名得益」に言及する蔵訳の第18願と第19願を参照。cf. 『浄土宗全集23 梵蔵和合璧浄土三部経』 pp. 240-243

一般的に、法を捨てることは重い罪悪であるとされている。cf. ツルティム, 藤仲 [2005] pp. 97-98; 藤仲 [2006] p. 77; また, シャーンティデーヴァ流の菩薩戒はガムポバの『解脱荘嚴』(和訳 ツルティム, 藤仲 [2007] p. 202)に取り上げられているが、そこでは、法を捨てることは十四根本重罪のうち第二に数えられている。cf. 釈舎 [1981] pp. 246; pratikṣepa は語源的に「前に投げる」「投げ出す」という意味であるが、これは漢訳仏教圏では通常「誹謗正法 (Skt.saddharma-pratikṣepa)」と理解されていて、単に「正法を捨てる」といった理解ではないようである。とはいえ『望仏』(p. 4328)の言及する『菩薩善戒経』には、「菩薩、若し同師同学にして菩薩方等の法蔵を誹謗し、相似の非法を受学頂戴するものあらば応に共に住すべからず」という用例があり、これは「誹謗」とは出ているものの、いったん受け入れた正しい大乘経を「投げ出す」「捨てる」といった意味ではないかと思われる。ちなみに〈無量寿経〉梵本和訳の中村訳、藤田訳では単に「誹謗」と訳され、この点について議論されていない。

- 18) テキストにより 'grub (現在時制ないし未来時制) と grub (過去時制) となっている。前者であるなら、誓願は衆生が立てた極楽往生の誓願がこれから成就するということになるし、後者(『弁別釈』はこちら)であるなら、無量光仏の仏国土建立の本願が成就したということになる。上の註17に出した『弁別釈』や、『弁別釈』に引用された『無量寿経』の記述からは、どちらかに断定しがたいように思われる。
- 19) 極楽に引導される前に中有が有るか無いかについては、東アジアでは『阿弥陀経』や『無量寿経』の「即得往生」の文言から無いと考える傾向にある。すなわち、「即」の意味について日本の浄土家では同時即と異時即との二つの解釈がある。浄土宗では異時即の意味に解釈し、肉身を捨ててのち速やかに極楽浄土に往生して不退転に住するという意味だとする。浄土真宗では同時即の意味に解釈し、現生において名号を聞いて信心歓喜の一念を起こした者は、その念と同時に来世の往生が決定するという。cf. 『浄土宗大辞典2』(1976) p. 497; ただし、原典に戻ってみるなら、それはただ他の生存を経ないで極楽に往生するという意味の解釈もむげに否定できないので、検討が必要である。この願文でも直接的には死後、悪趣に陥る前に、といった含意であろう。なお『瑜伽師地論』「本地分」(大正30 No. 1579 p. 321a20-b17; B.Bhattacharya ed. p. 198 1.20-p. 199 1.16; D No. 4035 Tshi 101a4-b6)には、胎生の者たちは最初に識が入った頰部曇のときから身処と意処以外の眼など四処は順次、成長するが、化生する者は、結生するとき、諸根が同時に現成するので、一挙に成立することが説かれている。極楽に生まれる者はもちろん化生である。
- 20) 五逆罪を犯した者と正法を捨てた者を往生から除外する規定は、蔵訳〈無量寿経〉の第十九願に出ている。cf. 藤仲 [2006] p. 77 note 86
- 21) Toh. No. 7018では、以下少し文章が欠落しているようである。
- 22) med de あるいは med du とある。『自註釈』に med de とあるのを採った。この仏が現在居られることと寿命の無限であることを対に述べた記述としては、〈阿弥陀経〉冒頭の「今現在説法」と、後続の「無量寿」という名号の解釈の部分に出ている。cf. 『浄土宗全集23 梵蔵和合璧浄土三部経』 p. 342, 346

を]しないで、今[もまた極楽に]現前に住しておられる。あなたに対して、意は[一境性に²³⁾]専注した(PS6a)[ひたむきな]尊敬でもって祈願したなら、業の成熟[した果報]以外²⁴⁾の寿命の尽きた者もまた(Toh. 4a)百年生きながらえるし、時ならぬ[横]死を余さず退けると説かれた²⁵⁾—依怙主無量寿に帰命します²⁶⁾。

[2-2-1-2. 名号を聞いた利徳三つを説くのを通じて帰命する cf. 『弁別釈』13b1]

広大な無数の三千[大千]世界[すべて]を[種々の]宝で[一杯に]充たして[勝者とその子に]施しを与えた者より、[或る者が]無量光の名号と極楽[浄土の功德]を(PS6b)聞いて[よく]淨信することにより合掌したなら、彼は[施しを与えた]者より福德が大きいと説かれた²⁷⁾—ゆえに、(祝220)無量光に対して、[三門の]尊敬をもって帰命します²⁸⁾。

23) これは止住を表す用語である。阿弥陀仏に関して行者の止観を説いたものとしては、『般舟三昧経』がある—『十住論』『念仏品』によると、これは初地歓喜地以上の菩薩の実践である。他方、〈阿弥陀経〉の「一心不乱」という部分の蔵訳は g-yeng ba med pa'i sems kyis (散乱の無い心でもって)であり、同様の表現は〈無量寿経〉蔵訳の第18願「来迎引接の願」の個所にも出るが、これらは多分に阿弥陀仏からの「慈悲の加祐」となっており、臨終での来迎見仏につながっている。他方、〈無量寿経〉「東方偈」の直前の個所や〈鼓音声陀羅尼経〉には、直接的には結びつけないで、平生に行うことにより、結果的に臨終時に来迎を得るという記述になっている。cf. 中御門 [2006] p. 39

24) 『弁別釈』には、「一般的に死には業が尽きたのと福德が尽きたのと寿命が尽きたのと[合計]三つ[がある。そ]のうち、業の異熟すなわち[かつての]業の投擲が尽きた以外」という。具体例として、「虚空[から]の落雷と断崖への転落、水に流されること、鬼神が寿命を奪うことなど、怖れの八つまたは十六」という。八つの怖れは、『蔵漢大辞典』p. 899には、獅子の怖れ、象の怖れ、火の怖れ、蛇の怖れ、水すなわち河の怖れ、[牢獄で繋がる]鉄鎖の怖れ、盗賊の怖れ、食肉鬼(昆舍遮)の怖れだという。ラリタヴィスタラには、天、盗賊、蛇、飢饉の荒地、戦い・諍い・分裂、罪惡、天、龍、ヤクシャにより悩まされることを挙げている。

25) 〈無量寿経〉蔵訳の第14願には、その住人の寿命が無量であるという。〈無量寿宗要経〉には、無量智善決定光明王如来の名号を聞いて、受持し、諷誦するなら、その人は横死がなくて寿命が増すし、それを自ら書写し、他人に書写させ、経函として受持、読誦するなら、短命な者も寿命が百歳になるし、死後には無量寿如来の無量功德蔵という国土に生まれるであろうと、説かれている。cf. 藤仲 [2006] pp. 81–82 note 106, p. 60 note 26; 池田 [1916] pp. 559–560

26) 『弁別釈』に、「概してこの頃、願文を唱えることと遷移(ポワ)の伝授を受けることは、老人の法に相当するのだと考えるが、若者の[師や仏法僧への]奉事が、長寿(13b)を毀損する病などにおいて[それを対治するの]もこれより勝ったものは無いと説かれている」という。

27) 『弁別釈』には、『国土莊嚴経』より「その極微ほど世界を破壊し碎いて塵と為したそれより多くの諸々の世界に宝を充たして施しを(14a)与えたのより、無量光の光の名号と極楽の殊勝な諸功德を、聞いて喜び、合掌する—その福德の一分にもならない。よって、聞いてから意(こころ)の疑いを除去しなさい。」と引用する。『同経』の典拠は、『浄土宗全集23 梵蔵和合璧浄土三部経』p. 286である。願文のこの部分の小野田 [2000] pp. 5–6に紹介されている。

28) 『弁別釈』は次のようにいう—

「ゆえに、何らかの極楽願文を得たことの意味は、僧俗の男性、上下の女性の誰もが無量光の名号と極楽を述べるのを聞いたとき、合掌して大いに尊敬したなら、大きな利益が有るのです。現在、教習が無いなら、死去したとき、諸師が遷移(ポワ)を為すとき無量光に帰依」

29) 或る者が無量光の御名を（東洋3b）聞いてから、裏表なく真心、骨髄の底〔から〕、一回ほど信が生じたなら、彼は正覚の道から退転しない—（宗648）依怙主無量光に帰命します。（PS7a）

30) 無量光仏の御名を聞いてから、彼は菩提座³¹⁾を（Toh. 4b）得ない間は、女に生まれえない。種姓（家柄）は善いものに生まれる。世々すべてにおいて戒が清浄になる—善逝無量光に帰命します³²⁾。

をいただくこと以外、為すべくない。だから、そのとき自己の信と、師の悲など一致協力した（14b）とき以外、自己がリンポチェにより救護されていないなら、亡者が救護されないことは決定したことなので、現在無量光に帰依をいただくことが必要だと説かれている

29) 聞名により不退転を得ることは、〈無量寿経〉蔵訳第48願「得不退転の願」に出てくる。cf.『浄土宗全集23 梵蔵和合壁浄土三部経』p. 254；この一段は、小野田〔2000〕p. 5に紹介されており、『無量寿経』を典拠としていることと、ツォンカバ著『最上国開門』では往生の因としてその部分が引用されていないことが、指摘されている。すなわち、ツォンカバは大乗の菩薩道に主眼を置くのに対して、チャクメーは、阿弥陀仏の聞名による救済性に主眼を置く。『弁別釈』には次のようにいう—

「概して、私たちは心が力弱いことによりそのような名号を聞く功德は有るのに〔それを〕疑い、信は何も生じない。（中略）それは、必要ない銀を爪ほどもって上への供養、下への施しをわずかに為した者は、聞思が生じていても、口を手で覆ってから驚くべき処となす。主無量光の名号—それは長い間、修行した者の修証した供物のようなものであると、仰っています。誰かが無量光の名号を聞いてから、裏表が無い、すなわち喉以上には思惟して黙っているようなことではなくて、（15a）心底、骨の髄から多くの回数、唱えてください。たとえ一回ほど信が生じたなら、その人は次第に、正覚を完成させた仏の道（※）から退転しないし〔菩薩〕地を得ることになるので、主無量光に礼拝します。」

※）発菩提心の有名な定義である『現観莊嚴論』I 18abに「発心は利他のために正等覚を欲すること」と比較しても、救済論的性格が明らかである。

30) 〈無量寿経〉蔵訳の第36願の「女人往生」、第44願の「生尊貴家」の願に対応する。『弁別釈』には、次のようにいう—

「仏無量光の名号を聞いてから、女—か弱くて、病と煩惱が多く、法を修証する力が弱いなど〔のもの〕について厭離し、〔女〕それに生まれなくて男根を具えることを欲する者が、祈願することにより、彼は菩提座すなわち正等覚を得ていない間は、世々の生ずすべてにおいて女として生まれえない。男根を具える。そこにおいては馬を殺す者、供物を受ける者、死体を運ぶ者、屠殺者、チャンダーラなど賤しい種姓ではない。（15b）善い種姓、王族または小官吏の種族またはバラモンの種族、高貴な者の種族に生まれるし、それもまたシャーリプトラがあまりに豊かな家と貧しい家に生まれえないし、中〔ほど〕の家に生まれてからもまた、常に「出家を多くしよう」というような戒の依処が円満であり、世々すべてにおいて戒により（※）相続を制したし、それも所対治分により損なわれることがなく、諸々の外と内のものが白蓮華のようになるので、善逝無量光に帰命します。ゆえに、浄戒を護りたいと欲する者もまた、まさにその依怙主に対して祈願することが重要であると、説かれている。」

※）tshul khirms kyi rgyud bsdams shing とあるが、意味より kyi（属格）を kyis（具格）に読んだ。

31) byang chub kyi snying po, bodhimaṇḍa（正覚の心髄）は、「菩提道場」と漢訳されることが多いが、インド、チベットでは未了義と了義の二種類に分けられて、未了義としてはブツダガヤの菩提樹下の場所をいい、了義としては仏の正覚そのものをいう。前註に出した『弁別釈』でもそうである。『維摩経』にも仏の正覚として説かれている。cf. 長尾〔1974〕pp. 58-60；ツルティム、藤伸〔2007〕p. 318 note 20

32) 『弁別釈』は、15b6から「これらを実践する仕方」、16b3から「資糧を積むことの最初に礼拝する所縁」を述べている。前者では、上述の形相の作意に加えて極楽浄土を次のように観想させる—

[2-2-2. 貪欲の対治—供養を捧げる支分³³⁾ cf. 『弁別釈』 18a3

2-2-2-1. 直接に具足した供養 cf. 『弁別釈』 18a4

「〔16a〕それもまた、これから日が沈む〔西の〕方の極楽国土は、大地すべてが宝の自性、種々の花、園林に荘厳されている。周囲には沐浴の池と果実をつけた樹により囲まれている。そのもとは、変化の鳥が妙なる声を響かせるのが充ちている。」

その後、上述のような中央の無量光仏の観想を説いている。そして観自在と大勢至の両菩薩に、周囲には仏菩薩、聖者の声聞、独覚などを現前に見るように明瞭にし、無散動の心によりそうすることを勧めて、「エマホーここから」などから、「私は三門の尊敬でもって礼拝します」というまでを一回緩やかに述べます。」という。心の止住をもって、願文の冒頭からここまでを唱えよ、ということであろうか。

「資糧を積むことの最初に礼拝する所縁」については、まず自己の右に今生の父、左に母、前に怒る敵、加害する妨げ、周囲に六種類の一切有情というように、大宴会の客人の集まりのように居る者すべてに、自己が先導して合掌する。語業としては、世尊・如来・阿羅漢・正等覚者・依怙主無量光に礼拝し、供養し、帰依する。同じく瑠璃光王仏（薬師如来）、釈迦牟尼仏、八大菩薩に対して順次、帰命する。そして、「変わらない法性」（ジクメーリンパ（*Jigs gling*）のものとして記される）、「欺かない三宝」（著者未詳 *bDe smon phyogs bsgrigs stod* p. 302）と、尊師が造られた「仏無量光に帰命します。極楽に生まれるよう加持し、極楽のロードー・ニンポ菩薩を述べたなら、必要な目的を具える」などというのと、本文でもって礼拝する、という。

ジクメーリンパ（*Jigs med gling pa*. 1729/1730–1798）は、ニンマ派教義の大成者ロンチェンパ（1308–1363）を幻視して教えと儀軌を授かり、そのニンティクの体系を継承した人である。ロードー・ニンポは、極楽往生して第八地を得たニンマ派のマハーヨーガの成就者カトクパ・ダムパ・デーシェク（*Ka thog pa dam pa bde gshegs*, 1122–1192）の本地の菩薩としての名とされており、カギユ派のジクテン・ゴンボ（*sKyob pa 'jig rten mgon po*. 1143–1217）の極楽願文にも見られる。カトクパは東チベットのニンマの本山カトク寺の創設者であり、「無量光仏により授けられた成就法」という典籍を著している。そこから略出した極楽願文が、『*bDe smon phyogs bsgrigs, s'Tod chad*, 祝詞集 上冊』（1994）pp. 159–163（*rDzogs pa'i sangs rgyas 'Od dpag med pas rGyal ba Ka thog pa dam pa bde gshegs la gnang ba'i sgrub thabs las khol du byung ba'i bde smon*））に収録されている。また『弁別釈』79a5-6には「チャクメーのこの『極楽願文』とパンチェンが造られた「欺き無き〔三〕宝」、尊者〔ツォンカパ〕の「究竟したもの *phul byung ma*」、一切智者ジクメーリンパが造られた「塵を離れた」〔といて始まる願文〕などもまた諦を見てから大地に住しておられる者の加持あるお言葉です」という。これらの極楽願文は、ツォンカパ著『最上国開門』の読誦版、パンチェン1世著『東北 No. 5896 Ka. 17b5-18a1, ジクメーリンパ著 *bDe smon phyogs bsgrigs stod*（1994）pp. 248–252, 東洋文庫 Ref. No. 2935 14b5-17b4 であろう。ちなみに、チベットで独自の阿弥陀仏成就法が登場しはじめたのは、西暦12世紀以降のことであり、これらは最も古い時代に属するものである。cf. Kapstein [2004] p. 24

『弁別釈』に戻ると、意業として、「これから最上の正覚まで主無量光、あなたより、帰依の依怙主の希望は他にありませんから、幸不幸、上下の何をすることも、あなたは知られる」と思って、合掌するまでに、すべてを叶える如意宝珠を思惟する。手を頭頂に置くと、仏菩薩の身へ供養を捧げ、「自他すべての有情の身体の障礙を浄めて、頂髻のように顕わでないものを得るように！」と願う。喉に置くと、語を供養し、「語の障礙を浄め、語は梵天の音声六十支分を自性としたものを得るように！」と願う。心臓に置くと、御心を供養し、「意の障礙を浄め、御心の智慧の功德を得るように！」と願う。臥具を地に敷いたとき、三門が等分であり、「障礙を浄め、仏身の相好の功德の海を得ますように！」と願う。他者に対しても「散動せず、同じくなさってください」と教えてから起きあがる。上述のように、諸々の礼拝とダーラニーを保ち、述べる、座に坐る。昼の法行の合間にするなら、善の廻向などをすべきである、という。

- 33) 『弁別釈』は、ここに示した三種類の供養に分けて説明している。まず直接的に自らが準備できる善いもの、浄らかなものにより供養する。次に、それらの物が無くても、想像したものにより供養する。終わりに、有情の業と福德の力から成就したこの三千大千世界の数多くのスメール山、日月と、天・龍・人の資財すべてによって供養する—『集学論』、『菩提道』

『灯論』などと同様な考え方である。cf. ツルティム、藤仲〔2007〕p.165, ツルティム、藤仲〔2005〕pp.201-204

『弁別釈』は、第一の「直接に具えた供養」について、住居の清掃、散水をして、仏の身語意の依処（すなわち仏塔・經典・仏像）が有るなら、配置し、前に何でも具えた諸々の供養を行う。供物の団子も古いのや不浄な種類などと、狡猾、歪曲により準備したものは、むしろ福德が尽きる因であるから、清浄なものを準備することが必要である、という一なお『鼓音声陀羅尼經』にも、この陀羅尼を唱える者は、浄らかな衣を着て、清浄で無垢の土地において、無量寿如来に花と香により供養し、菩提座の蓮華の場所と菩提樹の円満を観想すべきであるという。cf. 中御門〔2006a〕p.44;ジターリの阿弥陀仏成就法にもそれらの準備が詳しく説かれている。

次に、仏は供養について事物だとの想いは無いが、行者自身の資糧を完成させるには供養することが必要である。何も品物が無くても、浄らかな水と花を供えるし、自己の飲食をも準備してから成就したと思惟して、受用するのもいい、と仰っている、という。それもまた、自己の身体と受用する資財と善根の海という因から生じた直接に具足した供物のあるかぎり、または供物と功德水、洗脚水、花、焼香、灯明、香水、食べ物、奏楽など何でも在るものを、一通りには身体の思いこみを断って、僧侶などに対して捧げる。ついでに他の有情が極楽に生まれるための方便に勤める、という。

資財への思いこみを断って捧げるべきことを悟らなくて、かつて或る老人が閑寂処に住したとき、肉の塊を食べない間に死んで識が肉の中に入ってそのようなものになったこと、或る僧侶が銀に執着して銀の中にサソリとして生まれたことなどが多く有るから、思い込みを断って捧げる。そして、直接に捧げることができなくても、現在捧げようといって、執着しない習気を置くこと、諸々の善根を広大な供養雲として捧げることが必要である、という。第二の「意（こころ）により化作した供養」について、『弁別釈』には次のようにいう—

「直接にもの無くても、意により化作した（いわば想像した）鏡など八つの吉祥物、傘など八つのしるし、〔転輪王の持つ〕輪など七種の政宝（19b）と、有と寂（輪廻と涅槃）の善き諸々の吉祥・具足を捧げる。広汎に弁別するなら、吉祥の八つのしるし、七種の政宝、八つの物などを説明することが必要です。」

さらに詳説として、かつて正等覚者・天人師に対して、色の妃「光を持ったもの」が鏡を捧げたのが吉祥物として加持されたように、自己もまた施しがたい澄んで明澄な鏡を捧げることにより、「自他すべてが法性の義を証得しますように！」と祈る。同様に、村落の娘スジャータが釈迦牟尼に乳酪を捧げたように禅定食により生きること、護象の子が薬樹を捧げたことにより煩惱の病を除いたことと、童子が長寿茅草を捧げたことにより、生死を繰り返した衰えの無い仏身を得たこと、樹の女神が木瓜の果実を捧げたことにより十二支縁起が還滅して涅槃を得たことと、帝釈天が右旋海螺を捧げたことにより正法の声を轟かせること、バラモン「星勝」が黄丹を捧げたことにより三界を自在に調伏したこと、金剛手が白芥子を捧げたことにより威徳・能力の円満を得たことを考える。それもまた、大きな名声を欲するなら螺貝、長寿を欲するなら長寿茅草を、無病を欲するなら名医ジューヴァカを捧げるなどと、類推により捧げる。

八つの吉祥のしるしは仏の変化を表すが、それぞれを捧げたことにより、未来に自己にそれを得ることを祈る。それもまた、仏の頭に様々な飾られた美しい傘を捧げたことにより煩惱の苦熱から救護されること、仏の眼に宝玉を捧げたことにより慧眼を得ること、仏の舌に様々な蓮華を捧げたことにより、蓮華は水が付かないように輪廻に住していても輪廻の過失により染まらず世々すべてに妄語を語らず蓮華のような舌を得ること、仏の歯に右巻きの白螺貝を捧げたことにより歯の列の四十が顕わで、最上の味わいを得ること、である。螺貝の歯を輝かしたことにより正法の声を轟かすことと、仏の喉に宝瓶を捧げたことにより瓶が宝蔵により充たされることと（21a）自相統が正法により充たされることである。教化対象者たちの相統を成熟させたのと、御心に吉祥の虹の光を自性としたものを捧げたことにより、量りがたい義を知る仏智を相統に具足すること、凡人の身体より三倍勝れた幢のような仏像に、天の衣からできた絹の幢を捧げたことにより、煩惱の所対治分が無く諍いの方すべてに勝利することと、仏の脚の裏の輪相が石に絵・像として浮き出ているのへ、金から出来た千輻輪（21b）を捧げたことにより論争者すべてを圧倒し、三乗の法輪を転じたことにより、教化対象の有情たちの相統を調伏することを、祈る、という。

また、転輪王の具える七政宝について、1) 輪宝は、昔、転輪王たちが宮殿の一番頂上へ

2-2-2-2. 意により化作した供養 cf.『弁別積』19a5

2-2-2-3. 本来成就した供養 cf.『弁別積』19a5)

自己の身体と〔受用すべき〕資財および善根、直接に具わった供物の何でも在るもの、〔それが無くても〕意により化作した〔八〕吉祥物（PS7b）、めでたいもの³⁴⁾、七宝³⁵⁾、〔さらに〕本来成就しているもの〔である〕（Toh. 5a）三千〔大千〕世界の四洲、

＼から真実語を述べたことにより、東方の虚空から千幅の金輪政宝を具えたものがその王の前に至ってから、往きたいと欲するその地に、その輪により先導されていく。それと等しく他の政宝もまた具足することになる。2) 神珠宝は、石青色の神珠宝の光でもって、八由旬ほどの闇を除くことができる。「垢が無く昼も夜も同じ」と言われるように。さらに熱いときには涼しく、寒いときには暖かくできる。四洲の衆生たちの貧窮を除去できる。王の心が欲するものは何でも、その神珠から努力なく生ずることができる。3) 妃宝は、バラモンの娘であり、容色は太陽のようで、美しくて見目麗しい。女性の過失五つを離れて、八つの功德を具えている。他の者すべての意を奪う。王の思いを満足させる。4) 蔵臣宝は、毘沙門のようなものであり、受用の吉祥円満を具えている。王が「三千大千世界を金で飾りなさい」と命令しても刹那に成就できるし、空の宝蔵を目で見たことにより充たし、(22b) 与えられる賢者のようなもの。5) 象宝は、色が灰白で、六本の牙を具えている。頭頂は赤くて高い。珠玉の網で覆われている。ふつうの象千頭の力がある。王が早朝、夜明けに乗ってこのジャムブ洲を廻るなら、日が昇るとき宮殿に着く。大きな象を護る子〔の話〕のようなもの。6) 勝馬宝は、色が青く毛が孔雀の喉のようにみごとであり、無病で好ましい。いななきはジャムブ洲を充たす。王の心に浮かんだことすべてを知る。ジャムブ洲を一日に三回廻ることができる。聡明な馬の王バラハ（Bhalaha cf. 藤仲〔2006〕p. 93, Note 148, 最上の馬、観自在の化身の一つ）のようなもの。7) 將軍宝は（23a）、力を持っていて、技能と戦闘手段に巧みであり、〔馬兵、象兵、車兵、歩兵という〕四支の軍勢を持っている。弓を引くことほどにより敵軍すべてを破る。威光は強烈であり、広目天、クムバーンダ王（瓶腹、鳩盃茶）の王、聖人のようなものである。以上それらを知でもって化作して捧げる、という。転輪王の七政宝については〈俱舍論〉「世間品」Skt. III96に対する註釈を参照。cf. 山口、舟橋〔1955〕pp. 484-487

第三の「本来成就している供養」について『弁別積』は次のようにいう—

「本来、有情の業と福德の威力から成就しているの、三千〔大千〕世界の百の千万（コーティ）の四洲に住する百の千万（コーティ）のスマール山、日月と、上の天の〔受用すべき〕資財、下の龍の〔受用すべき〕資財、間の人の〔受用すべき〕資財すべてを、自己の知により受けて、依怙主（23b）無量光および〔その〕眷属に捧げます。「自他の有情すべてに益するために、大悲の力でもって受けてください」と申し上げるのです。自己に捧げる能力が有るのなら、勝者および〔その〕仏子には受けてくださる能力が必ず有ることを、説かれています。それらは、一つに有情共通の福德から成就したものと、二つにそのすべてはただ名のみ仮設有のみより対境〔である〕供物の側から「私のものです」「あなたのものです」といった差別が無いから、捧げるにふさわしいのです。以降、好ましい浄水と、花園と手鏡などの品物、好ましい事物のおよそ見えるものを、依怙主無量光に供養します。」
〈行願讃〉の対応箇所は、中御門〔2006a〕pp. 14-16, 49-52を参照。

34) bkra shis rdzas rtags；直前の訳註での『弁別積』を参照。『藏漢大辞典』p. 84は、bkra shis rdzas brgyad（八つの吉祥物）について、鏡、酪、長寿茅草、木瓜、右旋海螺、牛黄、黄丹、白芥子を挙げており、『弁別積』に一致する。他方、『仏学詞典』（1992）p. 48は、bkra shis rtags brgya（八瑞相、八吉祥徽）について吉祥結、妙蓮、宝傘、海螺、金輪、勝利幢、宝瓶、金魚を挙げている。『藏漢大辞典』p. 84, 1067によると、rtagsもまた八つの吉祥物を意味するので、bkra shis rdzasを単に反復しているだけとも見える。しかし、『弁別積』には、「鏡など八つの吉祥物、傘など八つのしるし」とも、「広汎に弁別するなら、吉祥の八つのしるし」ともい、詳しい説明として別々のものとしている。

35) rin chen bdun は、転輪王が具える七種類の宝である。すなわち、輪宝、神珠宝、妃宝、蔵臣宝、象宝、勝馬宝、將軍宝である。上の訳註33を参照。

スメール山、日月の百千万、天・龍・人のあらゆる〔受用すべき〕資財すべてを知りて受けて、〔供養雲として〕無量光に捧げます。私〔と他者すべて〕³⁶⁾を益するために、悲の力で受けとってください。³⁷⁾ (東洋4a)

参考文献

青木文教

- ・「ラーガアスヤ極楽願生偈」(『西藏原本 大無量寿経国訳』光寿会, 1928年)

池田澄達

- ・「梵本アパリミターユル陀羅尼経の校合」(『宗教研究』1-3, 1916年)

宇野順治

- ・「浄土教における大勢至菩薩の位置」(『印度学仏教学研究』35-2, 1987年)

小谷信千代

- ・『チベット俱舎学の研究』, 文栄堂, 1995年

小野田俊蔵

- ・「チベット撰述の浄土教仏典」(『佛教学大学院研究紀要』7, 1979年)
- ・「ツォンカバ造『最上国開門』試訳 ―チベットに於ける本願思想受容の一例として―」(『仏

36) 『弁別積』に次のようにいう―

「〔自 (24a) 他の有情すべてが極楽へ生まれますように!〕と思惟したなら、貪愛の対治になることと、福德の資糧を完成することと、極楽に生まれることの殊勝な目的が有るので、困難が少なく利益が大きな教誡である。しかし、この頃は、自分一人が生活し、大きいことに萎縮し、小さいことを軽蔑し、自己の善の取り分を断っていく、と仰っている。」

37) 『弁別積』に、続けて次のようにいう―

「それらの実践をなす仕方については、資糧田を前のように明瞭なのを供養の対境として縁じてから、最初にマンダラを捧げることが必要です。資糧田を前のように明瞭なのを供養の対境として縁じてから、最初にマンダラを捧げることが必要です。それも、次のように必ずすべきです。〔修行の〕依処を清掃したことにより、自他すべての相続は垢を浄めたと思惟する。そして、よい香と牛の〔新鮮な〕尿でもって塗ったとき、「菩提心 (24b) により相続を潤すように!」ということと、百字〔真言〕を唱えてから、「オーム・ヴァジュラ・ブフーミ・アー・フォーム」〔と唱えることに〕より依処を清浄、大勢力、金の大地、範圍が不可思議であることと、「ヴァジュラ・レカ、アーハ・フォーム」でもって、外の鉄輪囲山の状態で取りまいて中央に、「フォーム」でもって障碍を洗い清める。または、スメール山を生ずる基盤のようにして、次に中央の一つの大きな壇を置き、それこそが山王スメール山および四つの隅と四つの次第を具えている。それも東は水晶など因の宝珠からできた堅固で壯大です。四方に四洲、四維に小洲などと有・寂 (※1) の吉祥円満など完全無欠のものを明瞭にしたのと、他は上述のとおり直接に具足したもの、意により化作したもの、本来 (25a) 成就している供養の諸々の品物を知りより受けてから捧げ、「心を他に散動させないでください」と促してから、マンダラ、清掃、芳しい香により散水し、諸々の種字をも殊勝にしてから、壇などを置いたとおり三十七マンダラの完全無欠なものこれこそを、依怙主無量光および〔その〕仏子、十方の諸仏菩薩の衆に捧げます。「大悲により世の衆生のために受けてください」とい、三千大千世界を宝、マンダラなど、大地、香水などを、フォーム・グル、喜ばせるもの〔である〕マンダラなどの自性の (※2) 自己の身体と資財および善根から、力でもって受けてくださり、次に供養の (25b) 陀羅尼七三〔二十一回〕により広大に増長させるのです。」

(※1) srid bzhi だが、内容から srid zhi と読んだ。世間と出世間という意味である。

(※2) rang gzhang gi とある。rang bzhin gyi と読んだ。

教文化研究』27, 1981年)

- ・『『阿弥陀鼓音声陀羅尼經』に基づく西藏曼荼羅』（『日本仏教学会年報』52, 1987年）
- ・「西藏仏教の浄土教理解」（『現代における法然浄土教思想信仰の解明』, 浄土宗総合研究所, 2000年）

梶濱亮俊

- ・『チベットの浄土思想の研究』, 永田文昌堂, 2002年

鎌田茂雄

- ・全訳注『八宗綱要』, 講談社学術文庫, 2006年

北村太道, ツルティムケサン

- ・『秘密集会安立次第論註釈』, 永田文昌堂, 2000年

酒井真典

- ・『酒井真典著作集 第四巻 後期密教研究』, 法蔵館, 1988年

浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局

- ・『浄土宗全書』23, 山喜房仏書林, 1972年

白崎顯成

- ・「Jitali の『菩提過犯懺悔註菩薩学次第一 (Bodhyāpattidesānavṛttibodhisattvaśikṣākrama) 研究 2一』（『神戸女子大学紀要文学部篇』22-1, 1989年）

高田仁覚

- ・『インド・チベット真言密教の研究』, 密教学術振興会, 1978年

武内紹晃, ツルティム・ケサン, 小谷信千代, 櫻部建

- ・『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』（『浄土仏教の思想』3）, 講談社, 1993年

田中公明

- ・『チベットの仏たち』, 方丈堂出版, 2009年

ツルティム・ケサン

- ・「書評 川崎信定訳『チベットの死者の書』（『仏教学セミナー』51, 1990年）

ツルティム・ケサン, 藤仲孝司

- ・『菩提道次第大論の研究』, 文栄堂, 2005年
- ・『解脱の宝飾』, UNIO, 2007年

积舎幸紀

- ・「ソェンカバ教学における戒律」（『戒律思想の研究』, 平楽寺書店, 1981年）
- ・「無量光仏礼讃文をめぐる（序説）—その解説と和訳—」（『高田短期大学紀要』3, 1985年）

長尾雅人

- ・『維摩経 首楞嚴三昧経』（『大乘仏典』7）, 中央公論社, 1974年
- ・『撰大乘論 和訳と注解 下』, 講談社, 1987年

中御門敬教

- ・a 「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究（1）—陳那, 釈友, 智軍の〈普賢行願讃〉理解 七支供養の章（1-7章）—」（『浄土宗学研究』32, 2006年）
- ・b 「〈阿弥陀鼓音声陀羅尼經〉の研究 —阿弥陀仏信仰の密教への展開—」（『佛教大学総合研究

所紀要別冊 浄土教典籍の研究』, 2006年)

- ・「世親作『仏随念広註』和訳研究 —前半部分・仏十号に基づく三乗共通の念仏観—」(『佛教学総合研究所紀要』15, 2008年)
- ・「カルマチャクメーの浄土思想とその影響 —ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版—」(『佛教学総合研究所紀要』16, 2009年)
- ・「無着作『仏随念註』と『法随念註』和訳研究」(『佛教学総合研究所紀要』17, 2010年)

中村元, 早島鏡正, 紀野一義

- ・訳註『浄土三部経 上』, 岩波文庫, 1963年

平岡宏一

- ・『チベット死者の書』, 学習研究社, 1994年

佛教学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班

- ・『蔵訳無量寿経異本校合表(稿本)』, 1999年

西岡祖秀

- ・『トゥカン『一切宗義』シチェ派の章』(『西藏仏教宗義研究』2, 東洋文庫, 1978年)

藤仲孝司

- ・「カルマ・チャクメーの『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」」(『佛教学総合研究所紀要別冊』, 2006年)

藤仲孝司, 中御門敬教

- ・「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態 —阿弥陀仏に関するダライラマ七世の信仰と実践—」(『佛教学総合研究所紀要』10, 2003年)
- ・「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践 —「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して—」(『佛教学総合研究所紀要』11, 2004年)

宗川宗満

- ・「完全清浄極楽国土誓願」(『今岡教授還暦記念論文集(『浄土学』5, 6, 1933年)

安田章紀

- ・「カンドニンティック研究(1) —'Bras bu yongs rdzogs btags grol snying po'i rgyud dri med snying po 和訳—」(*ACTA TIBETICA ET BUDDHICA*, 2008)

山口益, 野沢静証

- ・『世親唯識の原典解明』, 法蔵館, 1953年

山口益, 舟橋一哉

- ・『俱舍論の原典解明 世間品』, 法蔵館, 1955年

山野智恵

- ・「金剛手の変遷」(『智山学報』47, 1998年)
- ・『『大宝積経』「密迹金剛力士会」の一考察』(『智山学報』50, 2001年)

頼富本宏

- ・『密教仏の研究』, 法蔵館, 1990年

W.Y. エヴァンス・ヴェンツ編, 加藤千晶・鈴木智子訳

- ・『チベット密教の祖 パドマサンバヴァの生涯』(春秋社, 2000年)

Krang dbyi sun

- *Bod rgya tshig mdzod chen mo* (藏漢大辞典), 民族出版社, 1985

Matthew Kapstein

- *The Nyingma School of Tibetan Buddhism: Reference materials*, Wisdom Publication, Boston, 1991
- *Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvātī to the Field of Great Bliss, Approaching the Land of Bliss; Religious Praxis in the Cult of Amitābha.* ed. by Richard K. Payne and Kenneth K. Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004

Peter Schwieger

- *Ein tibetisches Wunschgebet um Wiedergeburt in der Sukhāvātī*, St. Augustink, 1978

R. Thurman

- *Prayer for Rebirth in Sukhavati by Je Tsong Khapa written in 1395—Library of Tibetan Works and Archives, The Life and Teachings of Tsong Khapas*, 1982

Wang dbyi non

- *Sangs rgyas chos gzhung gi tshig mdzod* (佛学词典), 青海民族社出版, 1992

bKra shis

- *bDe smon phyogs bsgrigs, stod & smad*, 四川民族出版社, 1994

(なかみかど けいきょう 嘱託研究員)

2010年11月19日受理

〈Summary〉

A Japanese Translation and Study of *rNam dag bde chen zhing gi smon lam* (bDe chen smon lam) by Karma Chags med: The Descriptions of Avalokiteśvara and Mahāsthāna-prāpta, the Features of Sukhāvātī, and the Practise of Offerings.

NAKAMIKADO Keikyō

bDe-chen-sMon-lam (Prayer-for-the Sukhāvātī) by Karma Chags-med (skt. Rāgāsyā. 1612–1678), a scholar, master-practitioner of bKa'-rgyud-pa and rNying-ma-pa tradition, is the most famous and influential bDe-smon (Prayer-for-the Sukhāvātī) in Tibetan Buddhism, as well as *Zhing mchog sgo 'byed* by Tsong-kha-pa Blo-bzang-grags-pa (1357–1419), a founder of dGe-lugs-pa tradition. *bDe-chen-smon-lam* belongs to a group of concealed scriptures *gNam chos*, which were revealed by Amitābha-Buddha himself, to Mi-'gyur-rdo-rje (1645–1667), a young protégé sprul-sku. This have been an very important prayer to be recited at dharma-events and funerals by the monks of this tradition, and other lay-practitioners in general, and had influences culturally. In this paper, I have translated and studied, in cooperation with Mr.Fujinaka, the descriptions of Avalokiteśvara and Mahāsthāna-prāpta, the two great disciple of Amitābha, the features of Sukhāvātī to be meditated upon and worshiped, and the practise of offerings to them.

Key words: Karma Chags med, bDe ba can gyi smon lam (bDe smon), gNam chos, *rNam dag bde chen zhing gi smon lam* (bDe chen smon lam), Mi 'gyur rdo rje